

## 明七雑誌について

石田純郎

### はじめに

明七義塾は、明治八年（一八七五）八月二〇日から九年（一八七六）八月一日迄のわずか一年弱、高松市外磨屋町に設立された私立の医育機関で、別名を衆医会議所とも呼ばれた。明七義塾の開設者は柏原謙益で、講師は、中桐絢海、飯山正秀等であった。教授課目は、その前年に定められた医術開業試験法に拠り、学派はドイツ学派に拠った。当時の塾生は、三十余名、通学生四十余名であった。

明七義塾の名前は、明治七年に設立の構想がうかび、また医学七科を明らかにして、もって医術開業の資格を得せしむるの義によったという。

この明七義塾から出版されたのが明七雑誌である。明七雑誌は明治九年二月発行の第二号だけしか発見されていない。<sup>(1)</sup>  
△明七雑誌▽

明七雑誌第二号はA5版十八頁で、六篇の論文が掲載されている。

一 天然痘再感疑問

一 牛乳用量問題

一 同答弁

一 蛋白尿病治験疑問

一 尿中糖分及蛋白質試験法

一 寄生動物略説

(原文のまま)

簡単に内容を紹介する。

最初の論文は、天然痘が再感染したのではないかという症例報告で、著者は松山松齋である。小豆島の池田村の三六歳の男性は、四歳の時天然痘に罹患、全身に多くの痘痕を残していたが、明治八年四月二七日に、山道を暴風雨について、数里を歩いて帰宅した直後、悪寒戦慄と共に発熱し、三日目に発疹が出現した。周囲の人はこれを麻疹と考えていたが、八日目に至り、食欲不振、高熱、喉の乾きを訴え、眼脂も大量に出現し、口周囲や鼻丸等がびらんして臭気を発し、報告医を受診し、天然痘に再感染したのではないかと疑われている。排毒剤と強壯薬を投与し、四十数日後に全快したが、後に新しい痘痕を残した。天然痘の再感染はあるかどうか御教示いただきたいという内容である。

答としては、天然痘の再感染の可能性は強いが、詳細は府下の医学会社<sup>(2)</sup>へ問合わしているので、後で答えると記されている。

次の論文は森島鼎三からのもので、最近牛乳の飲用が流行しているが、飲むのに適切な量はいくらかという質問である。

中桐絢海がこれに答え、蛋白質必要量を牛乳だけで間に合わせるには、大人で一日四ポンドから五ポンド(約<sup>2</sup>と)必要と答えている。

四番目の論文は、山崎千仞の症例報告で、患者は五十余歳の男性、明治八年八月より肉眼的血尿、蛋白尿出現、顔貌は憔悴、眼は陥凹、顔色は灰色で、全身はるいそうし、皮膚は乾燥し、弾力を失い、著名な浮腫を認めた。尿は赤ブドウ酒

色、粘膜状物質を混じていたが、ポンペの治療法、すなわちキニーネ丸と稀硫酸ドラクマ水の投与により、肉眼的血尿は改善したが、蛋白尿は残ったという経過報告である。石田はネフロゼ加味腎炎による尿毒症の症例と考えた。

五番目の論文は、広田静逸による尿検査の実際である。糖および蛋白の検査法のやり方を列記している。

糖の検査法としては、①ムール氏法 ②泡醸試験法（ヘルスターション） ③トロンメル氏法 ④ヒーリング氏法 ⑤ロンゲ氏法 ⑥ホルスヒー氏法を上げ、蛋白の検査法としては、①温度を加える ②硝酸を滴する、の二法を説明している。そしてこれらは、ドイツのカール・エルンスト・ボワの原著よりの抄訳であるとの説明がある。

寺畑喜朔氏<sup>3)</sup>の尿検査法の歴史についての研究をみても、当雑誌の記載は、明治初期のものとしては、最も古い記載の一つだと考えられる。

最後の論文は、中桐絢海の寄生動物略説で、①疥癬虫 ②毛囊虫 ③虱（毛虱・頭虱・衣虱・病虱） ④サンドフロア ⑤糸状虫 ⑥蟯虫 の症状と治療について述べており、これも明治期の最も古い記載の一つと考えられる。

#### △明七義塾開校説▽

明七義塾より、明七義塾開校説なる小冊子も、同じ時期に出版されている。これはA5版20頁、木版刷で、表紙にはその中央に、明七義塾一二衆医会議所開校説と書かれ、右に明治八年七月十七日官許、左に明治八年八月二〇日開校と書かれている。

内容は

開塾之説

柏原謙益

明七義塾開業之説

中桐絢海

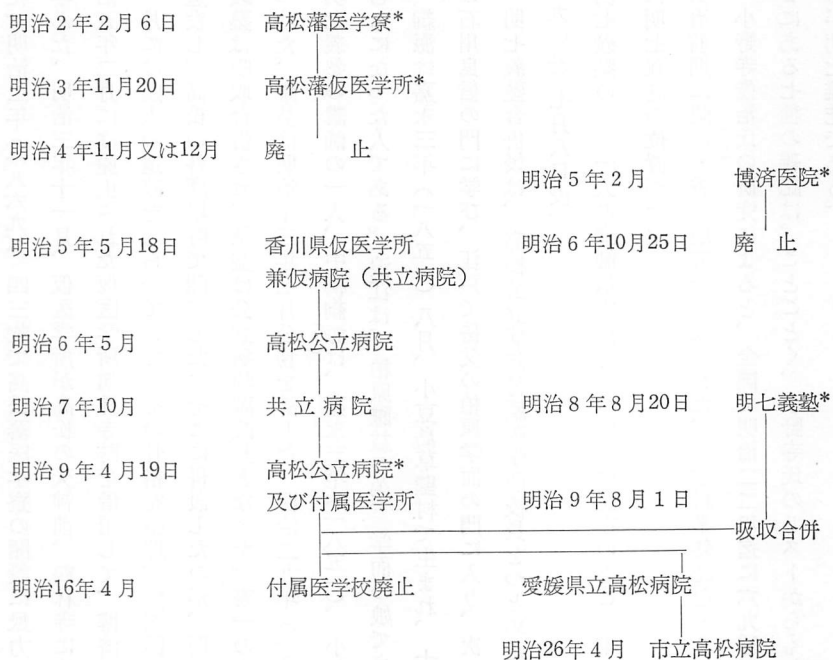
祝明七義塾開業席

安藤愿立

明七義塾開筵祝詞

山崎千仞

表 1 明治初期の高松の医育機関



\* 柏原謙益が関与した施設

明七義塾記 山崎翠  
 短歌 操

と、明七義塾開講の構想と祝詞である。

△明治初期の高松の医育機関▽

表一に、明治初期の高松の医育機関の変遷を示したが、明治二年二月六日に藩立の医学寮ではじまり、明治四年の廃藩置県により廃止され、直後に再建されたが、表に示した如く、名称、経営母体は混乱し、転々と変り、明治十六年四月に最終的に廃校となった。<sup>(4)</sup> 当時廃止された他の多くの地方医学校と似た経過をたどったのである。

△柏原謙益と中桐絢海▽

明七義塾の創設者、柏原謙益は、<sup>(5)</sup> 柏原謙好の長男として、文政一〇年（一八二七）十月一日、讃岐の鴻元村（現高松市屋島西町）に出生、高松藩医に師事した後、二八歳で緒方洪庵の適塾に入門した。慶応元年（一八六五）、三九歳で薬坊主となり、次いで表医師、翌年奥医師とな

った。明治二年（一八六九）、四三歳で高松藩医学寮の開設に尽力し教頭をつとめた。明治三年二月には大坂でボードインに学んだ。明治三年十一月、仮医学所が高松の天神前、鶴林寺に設けられた際、教授方となり、馬の解剖講義も行った。明治五年二月には廃止された仮医学所鶴林寺跡を借用して、博済医院を開き、内科諸科の治療の傍ら、医生を育成した。十一月には囚人の遺骸をもらってきて、その骨格を整理、解剖標本を作製した。明治六年には軍医となったが、明治八年に退役し、高松の外磨屋町で開業した。そこに併設したのが、明七義塾である。明治九年に高松公立病院が設置され、明七義塾は吸収合併され、謙益は公立病院副院長となった。表一の高松の医育機関のうち、柏原謙益が関与した施設に\*印をつけた。謙益は明治十三年七月公務を辞した。明治二十九年（一八九六）五月二三日没。

明七義塾の講師の一人、中桐<sup>6</sup>絢海は、嘉永三年（一八五二）、小豆島で種痘を開始した中桐文炳の孫娘、浪江と結婚、入りむこになった人である。浪江は、柏原謙益の弟、学而の娘であり、すなわち柏原謙益は、中桐<sup>6</sup>絢海の義理のおじに当る。絢海は嘉永三年（一八五二）八月、小豆島草壁村で生まれ、十二歳で柏原謙好の門に入り、医学を修め、十七歳で京都の石川良信の門に学び、江戸で岳父の柏原学而の門に入り、次いで大坂の医学校で、ボードイン、エルメレンスに学んだ。明七義塾合併後は、高松公立病院付属医学所校長をつとめたが、明治十一年辞職し、郷里で開業した。明治三八年（一九〇五）七月八日没。

明七義塾のもう一人の講師飯山正秀については現在のところ不明である。

#### △明七雑誌の位置づけ▽

明治前期に岡山・香川地方で出版された、医学科学雑誌を表2に示したが、明治二二年迄に七種の雑誌が出版されている。小野寺俊治<sup>(7)</sup>氏の研究によると、全国で明治二二年迄に六九種の医学雑誌が発行されたという。ところが小生の作った表2にある七種の雑誌は、ことごとく、小野寺氏のリストからなされている。この知られざる地方医学雑誌のうち、最も古いのが明七雑誌である。

表 2 明治前期の岡山・香川の医学，科学雑誌

雑誌名	発行母体	保存状況	創刊～廃刊
明七雑誌	高松 明七義塾	2号のみ	明9
好事雑報	岡山 弘文社	1～30号	明11～明12
医事月報	岡山県病院	1～5号	明15～明16
阪出譚話会報告	同 左	6, 7号のみ	明19
大日本私立衛生会 岡山支会雑誌	同 左	1号のみ	明19
教育会雑誌	私立岡山県教育会	1号のみ	明19
岡山医学会雑誌	同 左	1～1055号	明22～現在

明七雑誌第二号は明治九年二月の発行である。明治文化全集第五巻雑誌篇（昭和三年発行宮武外骨編）に明七雑誌は明治九年一月創刊、三月（三号）廃刊と記録されている。（寺畑喜朔民の御教示による。）二号以外の号は現在のところ未発見であるので、この記事が正しいとすると、小野寺氏のリストから、明七雑誌は全国の医学雑誌のうち十二番目に古い雑誌ということになる。また東京以外の地域で発行された最古の雑誌である。

さて明七義塾、明七雑誌という点、すぐ明六社、明六雑誌が連想されるが、明六社と明七義塾は関係があった。明六社の創設者の一人に柏原謙益の弟、学而があり、また中桐絢海はその学而の娘むこである。更に駿府学問所や静岡病院——そこは学而が関係していたが——そこで中桐絢海は勉強した。したがって柏原謙益と中桐絢海の二人は、明六社が明六雑誌を出版して、社会的活動を行っていたことを充分知っていたのは明白である。

以上明治九年創刊と推定される、東京以外で出版された最も古い医学雑誌、明七雑誌について紹介した。

本稿の要旨は昭和五八年四月十七日の日本医史学会関西大会で発表した。

文献および註

(1) 香川県長尾町の某旧家蔵。持主の希望により明記出来ない。

(2) この府下の医学会社は、明治八年に東京で創設され、五月に三宅秀が「医学雑誌」を発行した。後述する「明七義塾開校説」にも、医学上の疑問が生じた場合、自分の乏

しい経験でそれを決する事なく、都下の医学会社に問合わせると、中桐絢海が書いている。

- (3) 寺畑 喜朔 尿検査の歴史と臨床教育 日本医史学雑誌 二三卷 九八頁〜九九頁 一九七七。
- (4) 佐々木礼三 新修高松市史第2卷 高松医学医事史 七二頁〜七四頁 一九六六 の記述より表を作製した。
- (5) 佐々木礼三 讃岐医人伝 柏原謙好、謙益、学而と其一門 香川県医師会誌 一二卷二号 三六〜四〇頁 一九五九。
- (6) 佐々木礼三 讃岐医人伝 中桐文炳と絢海 香川県医師会誌 十六卷二号 四八〜四九頁 一九六四。
- (7) 小野寺俊治 初期の日本医学雑誌 日本医事新報 一七二八号 四七〜五〇頁 一九五九。

(三菱水島病院)

## The Medical Magazine called Meishichi Zasshi which was published in 1876 at Takamatsu

by

Sumio ISHIDA

Meishichi Zasshi was a medical magazine which was published by Meishichi-Gijuku in 1876. Meishichi-Gijuku was a private medical school during the early part of the Meiji era. Dr. Ken'eki Kashihara established it and he, Dr. Junkai Nakagiri and Dr. Masahide Iiyama lectured to students. Meishichi-Gijuku was established on August 20, 1875 and absorbed into Takamatsu Koritsu Hospital and Medical School on August 1, 1876. Only the second number of Meishichi Zasshi exists now. There are six papers in it. 1. The case report of reinfection of small pox. 2. The proper dosis of

milk to drink for one day. (Question) 3. The answer to it. 4. The case report of nephropneumonia.  
5. The examination of urine (glucose and protein). 6. Parasites. The first number of Meishichi  
Zasshi has not been discovered yet. Perhaps the first number was published in 1876. Meishichi Zasshi  
is one of the oldest medical magazines in Japan.